## 特別対談 第13回

# 星 亮一×志賀 泉（作家）

# 被災地のありのままの姿を伝える

**「原発被災地になった故郷への旅　福島県南相馬市」という自主制作の記録映画がある。構成・撮影・編集を行ったのは東京都在住の杉田このみさん（一橋大学情報基盤センター助手）、出演・監修は作家の志賀泉氏。神奈川県在住の志賀氏は南相馬市小高区出身で、双葉高校卒業。この映画は、被災地出身の志賀氏が、傷ついた故郷を歩きながら少年時代を淡々と振り返る、という内容だ。この映画を通して志賀氏が世の中に伝えたかったことを、星亮一が聞いた。**

星　今日初めてこの映画を見させていただき、その場所で生まれ育った人でなければ出てこない言葉や思いを随所に感じました。

ところで、志賀さんは南相馬市小高区出身ですよね。市内には原町高校がありますが、経歴を見ると双葉高校卒業となっています。どうして双葉高校に進学されたんですか。

志賀　特段深い意味はないんですが、僕はずっと「東京に行きたい」と考えていて、東京に近いという意味では原町高校より双葉高校だったんだと思います。「双葉」という校名に惹かれた部分もありましたね。

星　双葉郡は原発事故で大部分が立ち入れない状況ですが、被災地のことを語ってもらうとき、原町高校OBが話すのと双葉高校OBが話すのでは重みが違うように感じます。

志賀　現在、双葉高校はいわき明星大学のキャンパス内に仮校舎を設け、サテライト校として頑張っています。この3月に約30人が卒業しますが、そうすると在校生は残り約30人です。新入生は多く見積もって10人前後なので「近い将来消滅するのは避けられない」という危機感を在校生もわれわれOBも持っています。ただ、その危機感故に在校生は「自分たちが双葉高校の名前を残すんだ」と強い気持ちで勉強に励んでいます。ですから彼らの顔つきは非常に引き締まって見えます。

星　小高区を最初に訪れたのはいつですか。

志賀　小高区は原発の避難区域になったため、私がようやく立ち入ることができたのは、避難指示が解除された後の2012年6月です。原町区は震災直後の4月に訪れ、津波の爪痕が残る海岸沿いなどを歩きました。無事だった友人のところも訪ね歩きました。

星　私も震災後、南相馬市や浪江町などを取材しましたが、志賀さんと決定的に違うのは、漁船が打ち上げられたり、車が横転したり、家屋が流されて土台だけが残る風景を見て「これは酷いな」と思う半面、どこか自分の中でピタッと収まる感覚が持てずにいたんです。

それが何なのかずっとモヤモヤしていたんですが、映画の中で志賀さんが小高区を歩き、少年時代を振り返る様子を見たとき、被災地出身者がバックボーンを持って語るのと、われわれのように一、二度訪れる取材者では、当然ではあるけれどやっぱり違うな、とあらためて思い知らされましたね。

志賀　そこが、今回の映画を通して伝えたかった1つなんです。例えばマスコミは、被災地を取材するとき最初にテーマを設定します。そして、あらかじめ文脈を用意しておいて、それに沿う形で必要な映像だけを切り取っていきます。

でも、われわれ被災地出身者はテーマなんて必要ない。そこに現存する風景こそがテーマで、見たままを受け止めればいいんです。

もっと言うと、マスコミは「原発被災地」というくくりで語るが、われわれにとってそこは、被災地である前に故郷なんです。そして、故郷を政治のだしに使ってほしくない、という思いを持っています。

外から訪れた人は、夕日が差し込む里山の風景を見て、単純に「美しい」とは思えないかもしれない。でも、われわれ被災地出身者は口に出して「美しい」と自由に言うことができる。そういう自由な立場から、政治の関与を抜きにして、被災地のありのままの姿を伝えたい――そんな思いが、この映画には込められています。

星　被災地を見たり、原発の状況を知るにつけ、私は「一帯はもう戻れない」と早くから言ってきましたが、仮設住宅を回ると「最期を故郷で迎えたい」と話す高齢者が少なくない。それでも「どこかで踏ん切りを付け、新天地で出直すべきだ」と考えてきましたが、映画を見たとき「やはり故郷は簡単には捨てられないし、私のような第三者が言うのははばかられる」と感じましたね。

### 原発を常に身近に感じてきた双葉高生

星　間もなく震災から丸3年になるわけですが、福島県の復興は遅々として進んでいない。一方、新聞報道などを見ると、政府が原発周辺を国有化すると報じられたり、地域によっては除染して戻ると報じられたり、どこか一貫性がないように感じます。それもこれも、政府が被災者の複雑な心情に接し、右に左に揺れている証しなんでしょうが、半面、震災から3年も過ぎると、やはり踏ん切りを付ける必要性も出てくるのではないでしょうか。

志賀　被災者からは「私たちは戻れるのか戻れないのか、はっきりしてほしい」との声をよく聞きます。被災者は浮き草状態で、どこに着地点を見いだせばいいか分からずにいます。一方、双葉町や大熊町など原発近くに住んでいた人からは「どうせ住めないんだから、はっきり戻れないと言ってほしい」との声が日増しに強くなっています。

映画を撮影した杉田このみさん

星　東京には原発周辺の観光地化を真面目に考えている人たちがいます。それを聞いたとき、私は「福島県は見せ物じゃない」と思いましたが、富岡町には外から人を連れてきて被災地を案内している方がいるというから、県外の人に現地を見てもらい、知ってもらうのも大切なんだろうと最近は感じています。

志賀　原発周辺を国有化し、中間貯蔵施設をつくる、そして土地所有者には十分な賠償を行い、新天地で出直してもらう、これについては私も異論はありません。ただ、それは極めて放射線量が高い地域に限った話で、周辺のグレーゾーンとされる地域では、震災・原発事故を後世に伝える施設をつくったり、被災者が故人に思いを馳せる場所を設けるなどしてもいいのかな、と思います。

星　戻れない地域とグレーゾーンとされる地域を明確に分け、対象の住民にはきちんと賠償する、最近そ